



『こたろうとりゅう』

脚本／津田真一 絵／ザ・キャビンカンパニー
2,090円(童心社)

竜の子として生まれたこたろうは、人間の村で育ちました。貧しい村を救うために旅立ち、母親の竜と力を合わせて岩山を突き崩し、湖の水を流します。長野の伝説をもとにした壮大な物語を、迫力ある絵で描きます。

トリニダード・トバゴ



『はじめての やぎとライオン』

絵／小山友子
1,925円(教育画劇)

激しい夕立にあってしまったヤギは、ライオンの家で雨宿りをさせてもらうことになりました。親切そうなライオンですが、自分を食べようとしていると気づいたヤギは……。

ウグライナ



『わらのうし』

脚本／八百板洋子 絵／日紫喜洋子
2,090円(童心社)

おばあさんに言われて、おじいさんがつくった「わらのうし」。タールを塗って草原に連れていくと、クマやオオカミ、キツネがびたつくっついてしまいます。わらのうしによって、貧しい暮らしは思いがけない方向へ。



『おむすびころりん』

脚本・絵／長野ヒデ子
1,650円(童心社)

おばあさんのにぎったおむすびを持って、おじいさんは薪を切りに出かけました。おむすびは「ころころころ～」と転がって、穴の中へ。あとを追ったおじいさんが出会ったのは……。画面を抜くたびに楽しさが広がります。

イギリス

『3びきのくま』

脚本／はせがわさとみ 絵／和歌山静子
2,090円(童心社)

散歩に出かけたクマの家に、ひとりの女の子がやってきます。スーブも、椅子も、ベッドも「大きい」「中くらい」「小さい」と全部試してみても……。怖いもの知らずな女の子とクマの出会いを描いたイギリスの民話。



ミャンマー



『ひよこ と ねこ』

脚本／重松彌佐 絵／村田エミコ
2,090円(童心社)

大好きなケーキを焼いてもらうために、ヒヨコが薪を拾いに行くと、ネコに会いました。食べられそうになったヒヨコは、ケーキを食べに来るように言って、逃がしてもらいますが、ついケーキを全部食べてしまいました。

イギリス

『みつつのねがいごと』

脚本／やえがしなおこ 絵／伊野孝行
1,540円(童心社)

木こりが森で木を切ろうとすると、木の妖精があらわれ、木を切らないなら3つの願いごとをかなえると言いました。木こりは切らずに家へ戻りますが、つい「ソーセージが食べたい!」と言ってしまいます。



『えすがたにようぼう』

文／今江祥智 絵／赤羽末吉
1,650円(BL出版)

働き者の門太は夕顔の花のような美しい女房を得ますが、女房のことが気になって仕事にならず、絵姿を畑に持参します。その絵が殿さまの目にとまり女房を奪われるも、笑顔にできたのは門太だけ。愛と知恵で女房を取り戻す爽快な民話。



『さるじぞう』

再話／大黒みほ 絵／斎藤隆夫
1,430円(あすなろ書房)

川辺で大福をたらぶく食べて眠くなってしまったおじいさんは、そのまま眠ってしまいました。それを見つけたサルたちはお地蔵さんと間違えて、おじいさんを川向こうのお堂へ運ぼうと川を渡ろうとします。



『国生み イザナギ イザナミ』

文・絵／飯野和好
1,540円(バイ インターナショナル)

はるか昔、イザナギとイザナミの2柱の神が日本の島々を生みました。やがて火の神を生んだイザナミは黄泉の国へ。日本のはじまりを描く壮大な「国生み」の神話が迫力いっぱい描かれます。「日本の神話」シリーズ全5巻。

『マーヤのさるたいじ 女の子の昔話えほん 日本のおはなし』

再話／中脇初枝 絵／唐木みゆ
1,870円(偕成社)

川で拾った桃の種から木を育てたマーヤ。ずるいサルに実をとられてしまい、退治に出かけます。道中で出会った仲間たちと力を合わせ、サルをこらしめられるかな？ 女の子が主人公の沖永良部島に伝わる昔ばなしです。



日本の昔ばなし



『おんぶおばけ 日本むかしばなし』

文・絵／いもとようこ
1,650円(金の星社)

村人たちが恐れる「おんぶおばけ」。けれど、ひとりのおばあさんが「わしがおんぶしてやるわい」と言い、子守歌まで歌ってやります。おばけはうれしそうに背中にゆられ、その姿はやがて……。



『シマフクロウとサケ アイヌのカムイユカラ<神謡>より』

古布絵制作・再話／宇梶静江
品切れ中(藤原書店)

炎のように輝く大きな目のシマフクロウは、村を見守る神の鳥。ところが群れのはしを泳ぐサケがあざ笑います。すると、瞬間に海は干上がり……。自然への畏怖を伝える神謡を、古布とアイヌ伝統の刺しゅうで綴り、描きだします。

著作権保護コンテンツ



『すいちゃんはいそがしい』

企画／こどもの視点ラボ
写真／てんてん
1,650円 (Gakken)

すいちゃんの日が始まりました。公園やお買い物に行つて過ごします。その間にもあっちへ行ったりこっちへ行ったりと、いろいろ動き回る様子をとらえています。寝ている間もじっとしていません。



新刊

『へんしん みず!』

構成・文／川村康文、小林尚美
写真／遠藤 宏
1,540円 (岩崎書店)

触れるけれど、つかめない水を水風船に入れて凍らしてみたら、カチコチになりました。割ってかけらになったものをお鍋に入れてあたためると、あっという間にとけて、さらに水は変身します。

『ひこうきが しゅっぱつします』

写真／岡田光司 文／岡田康子
1,650円 (文研出版)

空港に到着した飛行機の、次の出発の準備を整えるのが、グランドハンドリングの仕事です。500人分の荷物や食べものなどを出し入れし、準備を整え牽引車で飛行機を誘導路に導くまでを、55分で済ませます。



『たいせつなたまご』

作／キッチンミノル
1,320円 (白泉社)

ハコニワ・ファームの朝は、ニワトリたちの健康チェックから始まります。エサやり、水やり、フンの始末や道具の掃除、いろいろな人が働くなか、ニワトリたちが卵を産み落としました。



『はたらく本屋』

写真／吉田亮人 文／矢萩多聞
2,420円 (創元社)

大阪の長谷川書店で働くみのるさんの一日を見ていきましょう。朝9時、シャッターを潜り抜けて店内へ入り、おじさんたちと開店準備。10時に開店したら、接客や品出しなどで、あっという間に夜10時の閉店です。



『みんなをつなぐ アイヌの糸』

写真・文／横塚眞己人
2,035円 (ほるぷ出版)

アイヌの女性たちが織ってきたアットゥシと呼ばれる伝統的な布を、北海道の雪子さんは60年以上織り続けています。それは、オヒョウの木の皮をはいで、なめらかな内皮で糸をつくることから始まります。



新刊

『くだものはな なのはな?』

構成・文／宮崎祥子
写真／網野文絵
1,540円 (岩崎書店)

小さな黄色い花は何の花? パナナの花でした。松ぼっくりのような紫の花は、パイナップル。おしべに囲まれたまん丸頭のめしべの花は、みかん。果物の花の、どの部分が大きくなって実になるのかもよくわかります。



『ひき石と24丁のとうふ』

作／大西暢夫
1,760円 (アリス館)

人里離れた誰もいない山の中に、一軒のお豆腐屋さんがありました。目があまりよく見えない90歳を超えたミナおばあちゃんは、二升五合の大豆を6時間かけてひき石でひいて、豆腐をつくります。



『たんぽぽはひとがすき』

写真／埴 沙萌
文／嶋田泰子
2,200円 (ポプラ社)

タンポポは、背が低く光が届かないので、3つの作戦で太陽の光を手に入れます。まわりの草が枯れる秋に葉を広げること、ほかの植物が育ちににくいところで生きること、刈られても負けないこと。タンポポは人のそばで咲いています。

『シロツメクサはともだち』

作／鈴木 純
1,540円 (プロンズ新社)
道端に咲く白い花、シロツメクサはまん丸の花のようですが、実は小さな花が集まっていて、その数は100個くらいあることも! 花がしおれて、種ができ、また芽が出て育っていく様子を追っていきます。



『テントウムシ みつけ!』

構成・文／里中正紀
1,870円 (徳間書店)

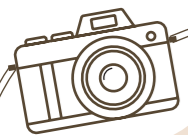
春、野原にはたくさんの虫たちが動き始めます。テントウムシを見つけるには、エサとなるアブラムシがいるカラスノエンドウを探しましょう。テントウムシに触ってみると、死んだふりをして、脚から黄色い汁を出します。



『うまれたよ! ヤモリ』

写真・文／関 慎太郎
2,640円 (岩崎書店)

昼間は物陰に隠れ、狭い隙間をいくヤモリは、暗くて人目につかない場所に卵を産みます。お母さんヤモリは年に1回から3回、一度に2個の卵を産みます。2カ月後、産み落とされた卵の殻をつきやぶって、赤ちゃんヤモリが姿をあらわします。



こんな写真絵本も!

『やっぱり じゃない!』

作／チョーヒカル
1,694円 (フレーベル館)

こんがり焼けたおいしそうなピザと思ったら、カボチャでした。甘い和菓子、じゃなくて、みかん。小さい魚じゃなくて、豆など、見た目と想像するのとはまったく違うものがどんどんあらわれます。



今号の
注目

『はじめてであう きょうりゅう』

作／バスチャン・コントロール
訳／真鍋 真
2,200円(岩波書店)

博物館で出合える恐竜の化石からは、大きさ、食べていたもの、同じ時代に生きていた動物など、いろんなことがわかります。スピノサウルスやティロドクスなど、ステンシルでカラフルに描かれた恐竜たちです。



編集の三輪侑紀子さんより

そぎ落とした表現とデザイン的な発想の楽しさがぎゅっとつまった、異色の恐竜絵本ができました。ページをめくれば「恐竜ってどんな生きもの?」「何を食べていたのかな?」など、恐竜に興味を持ち始めた小さな子と一緒に知りたい基本のポイントが、スマートに紹介されています。翻訳は、恐竜博士の真鍋真先生。最新の研究結果もふまえ、あたたかな語り口で丁寧に訳してくださいました。プレゼントにもおすすめです!

『100この タネが とんでった』

文／イザベル・ミニョス・マルティンス
絵／河野ヤラ政枝
訳／木下真穂
1,650円(岩波書店)



1本の松から飛びだした100個の種。道路に落ちた10個、川に沈んだ20個、石の上に落ちた10個、鳥に食べられた25個……。種たちはどうなるの? ドキドキの大冒険です。

『おっ!』

作／高畠 純
1,540円(絵本館)



誰かの後ろ姿が、ページをめくると振り向いて「おっ!」。動物の愉快的顔があらわれて思わず笑顔です。とばけた表情が楽しくて何度もめくりたくなります。動物の後ろ姿から振り向いた表情を想像してみましょう。

『トドランド』

文／おおなり修司
絵／丸山誠司
1,540円(絵本館)



ここは、夢のトドランドです。マークはトド、ガイドもトド……。あちらもこちらトドだらけです。おみやげは粘土のトド、バレードもトド! トドトドトド、リズムに乗って、トドの世界を満喫です。

『ねたくない ちっちゃな パンダ』

作／デイヴィッド・ウォーカー
訳／ギョウ・ヤマグチ
1,870円(イマジネーション・プラス)



森のちっちゃなパンダは、友だちと遊ぶのが大好きです。日が暮れておやすみの時間になっても、まだ寝たくありません。そこでママとパパは、ちっちゃなパンダが眠くなる方法を、いろいろ考えました。

『なつだね』

作／合田里美
1,870円(岩崎書店)



日差しや風、におい、海の色。五感で夏の始まりを感じます。ランドセルを玄関に放り投げて海へ行ってみると、たくさんの人たちが夏を感じにきていました。うれしくなって、思わず海へ走りだしたくなります。

『ポタポタ ぴちゃん!』

作／中垣ゆたか
1,540円(岩崎書店)



ポタポタぴちゃん! しずくの音から始まり、次から次へとオノマトペがながっていきます。楽器の音あり、動物の鳴き声あり、大きな音から小さな音までテンポよく進み、登場人物も増えてとてもにぎやかになりました。

『まるで むかしばなし のような
ハンス・クリスチャン・アンデルセンの一生』

文／ジェイン・ヨーレン
絵／ブルーク・ポイントン・ヒューズ
訳／福本友美子
1,760円(岩崎書店)



母親は、字は読めないけれど、聞いたことのあるおはなしは全部覚えていました。そのおはなしを聞いて育った男の子は、いつの日か詩人か作家になりたいと思っていましたが、大きくなるまで学校に行けませんでした。

『そらのさんぽ』

詩／石津ちひろ
絵／荒井良二
1,540円(岩波書店)



川べりに並んで咲く菜の花、さえずりの練習をするウグイス、かじったりんご、ネコ、空の雲……。すぐそばにある光景をあたたかな言葉で紡いだ20編の詩がおさめられています。声に出して味わってみませんか?

著作権保護コンテンツ

『空をとびたいルーカスと
世界でいちばんたかい本の山』

作／ロシオ・ボニージャ
訳／中井はるの
2,310円(アチエロ)



ルーカスは小さなときからずっと、空を飛びたいと思っていました。ママは「とぶ方法は、ほかにもあるわ」と言って1冊の本をくれました。夢中で本を読むルーカス。その日からルーカスは飛び始めたのです。

『いくぞ〜 ヒトデのほし』

絵／ともながたろ
文／なかのひろみ
監修／木暮陽一、幸塚久典
1,650円(アリス館)



空の星たちが、海の底に棲んでいるヒトデに会いにやってきました。友だちになれるかな。「目や口はどこにあるの?」「何を食べるの?」。星たちは興味津々。50種類以上のヒトデが登場し、その秘密に迫ります。

『かきごおりの ゆきだるま』

作／山岡ひかる
1,320円(アリス館)



暑い夏のある日、ゆきだるまのコタは「しろくまや」にかき氷を食べに出かけることにしました。雲の間から太陽がのぞくと、今にも溶けてしまいそうです。売り切れる前に、コタはやっとお店に着くことができました。

『ねこのいえで』

作／高橋和枝
1,650円(アリス館)



ネコのちーこがいなくなりました。ちーこはずっと家の中で暮らしてきたので、外の世界を知りません。見つからなかったらどうしよう。迷子のチラシをつくって近所に配って探すことにしました。

『ダニーさんの ちゃぶだい』

企画／ダニー・ネフセタイ
作／なるかわしんご
1,980円(イマジネーション・プラス)



イスラエル生まれのダニーさんは、国を守るために軍隊に入り、徴兵制を終えると日本にやってきました。公園で敵と思っていた国々の人たちと親しくなり、平和を願う丸いちゃぶ台づくりを始めることにしました。

もう 読んだ? 新刊 100!!

2025年6～8月に発売された新刊絵本の中から、読みきかせにもおすすめの100冊を選びました。子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。

※出版社五十音順 ※㊦は右開きの本。㊧は縦開きの本。
㊦ マークは乳幼児から、㊧は中・高校生も楽しめる本です。

定期購読者限定プレゼント

新刊絵本プレゼントの詳細は、このページの下欄をご覧ください。

『きたよ きたよ きせつのこ』

詩／杉本深由起
絵／吉田尚令
1,760円(あかね書房)



忘れ物名人のはるこさんは、つくしの坊やや小鳥のさえずりを取りに戻るの、なかなか春になりません。早起きのなつおくん、静けさが好きなあきえさん、わんぱくなふゆたくん、どの子も楽しい季節の子です。

『きいろいバス』

作／ローレン・ロング
訳／林 木林
1,980円(あすなろ書房)



お日さまのようにピカピカな黄色いスクールバスは、子どもや老人たちを大切な場所から大切な場所へと運んでいました。時は流れ、動かなくなったバスは、川べりに置き去りにされ、忘れられようとしていました。

『ラクダで塩をはこぶ道
サハラ砂漠750キロの旅』

作／エリザベス・ズーノン
訳／千葉茂樹
1,980円(あすなろ書房)



ラクダのキャラバンで、タウデニからトンブクトゥまで塩を運び日がやってきました。ほくのラクダ、ラクマールに岩塩を積んで出発です。商人の父さんと歩くサハラ砂漠の旅には、この先どんなことが待っているのでしょうか。

※JPIC直販の定期購読の方に、抽選で新刊絵本100冊から1冊をプレゼントします。巻末のアンケートハガキまたはホームページのアンケートフォームから応募してください。

著作権保護コンテンツ

1 ～ 3 月 の プ ロ グ ラ ム

プログラム (各 10 ～ 15 分) 小学校高学年

1月 テーマ：午年の初読み

①『あけましておめでとう』

文／中川ひろたか 絵／村上康成
1,540円(童心社)

この絵本のお正月の風景は今ほ珍しいかもしれませんが、新年を祝う気持ちは昔も今も変わらないと思います。



②『十二支のしんねんかい』

文／みきつきみ 画／柳原良平
1,210円(こぐま社)

はっきりと、リズムカルに読みましょう！最後のページの干支の紹介は厳かに、大げさに読んでみてください。



③『この世でいちばん すばらしい馬』

作・絵／チェン・ジャンホン 訳／平岡 敦
2,090円(徳間書店)

2026年の干支の午(馬)が出てくる本を読みます。と言って読み始めてもいいですね。



2月 テーマ：昔ばなしの鬼と現代の鬼??

①『いっすんぼうし』

作／いしいももこ 絵／あきのふく
1,210円(福音館書店)

昔ばなしを語るように読むのが理想ですが、難しければ、せめてゆったり読みましょう。



②『オニのサラリーマン』

文／富安陽子 絵／大島妙子
1,760円(福音館書店)

最後のページの「わし、オニでんねん。すんまへん」のところは、なりきってどうぞ。



3月 テーマ：新年度へ旅立ちのときに

①『あさになったので まどをあけますよ』

作／荒井良二 1,430円(偕成社)
東日本大震災の直後に作者が思いを込めて制作した絵本です。その思いが伝わるように読めます。



②『とべ！ ちいさいプロペラき』

作／小風さち 絵／山本忠敬 1,320円(福音館書店)
クライマックスの小さなプロペラ機が飛び立つシーンは、臨場感たっぷり。



③『おとなからきみへ』

作／サトシン 絵／羽尻利門 1,760円(主婦の友社)
「みなさんを、ずっとずっと応援しているよ！」という思いを込めて。



(横山裕美)

プログラム (各 10 ～ 15 分) 小学校中学年

1月 テーマ：今年は午年

①『なんでもできる!?!』

作／五味太郎 1,320円(偕成社)

人と馬の掛け合いで進む展開を元気に読みましょう。ふたりで読み合っても楽しいです。前向きな気持ちで一年を始められますよ。



②『空とぶ馬と七人のきょうだい モンゴルの北斗七星のおはなし』

文／イチノロブ・ガンバートル 絵／バーサンスレン・ボロルマー 訳／津田紀子 1,760円(あかつき教育図書)

次はじっくり昔ばなしの世界に入ってもらいましょう。星を見る目が変わるかもしれません。



2月 テーマ：雪の森の中では

①『ゆきの ゆきちゃん』

作／きくちちき 2,750円(ミシマ社)

ゆきちゃんと一緒に、雪の中で思いきり跳ねましょう。詩的な言葉はリズムカルに読むと、楽しさが伝わりますよ。



②『こんこんさまに さしあげそうろう』

作／森 はな 絵／梶山俊夫 1,870円(PHP 研究所)
厳しい冬の世界ですが、母子ギツネの愛情や、ギツネと共存しようとする人間の姿に、気持ちほっこりあたたかくなります。



3月 テーマ：君にエールをおくります

①『ぼくが見える?』

作／バク・ジヒ 訳／おおたけきよみ 1,540円(光村教育図書)

ヨンウくんが勇気を出して踏みだす一歩を、応援したくなりますね。韓国の絵本だと教えてあげると、名前もなるほどだと思います。



②『おおきなかべが あったとさ』

文／サトシン 絵／広瀬克也 1,650円(文芸堂)

次々にあらわれる壁を乗り越えていくのは爽快です。みんなの力で越えていくシーンでは、声を合わせてどーんと倒せたらいいですね。



③『しあわせに なあれ』

詩／弓削田健介 絵／松成真理子 1,430円(瑞雲舎)

言葉と絵をじっくり味わってもらえるよう、ゆつくりと読みます。子どもたちが幸せになってほしい、と願いをこめて読み終えます。



(粟生真弓)

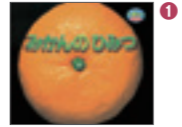
プログラム (各 10 ～ 15 分) 小学校低学年

1月 テーマ：冬には欠かせません

①『みかんのひみつ』

監修／鈴木伸一 写真／岩間史朗 1,430円(ひさかたチャイルド)

みかんのひみつが満載です。おうちでも話題にできるよう、ゆつくり読みかかせします。



②『わたしのゆたんぼ』

作／きたむらさとし 1,320円(偕成社)

湯たんぼになじみがない子が大半でしょうか。エコな暖房器具で、ペットボトルでも代用できるんだよ、補足説明をしましょう。



③『トムがてぶくろおとしたら』

文／ジム・エイルズワース 絵／バーバラ・マクリントック 訳／福本友美子 1,760円(犀の工房)

暖を求める動物たちの気持ちになって読むと、驚きの結末に、さらに盛り上がりします。



2月 テーマ：2月のいろんな記念日

①『かえるをのんだ ととさん』

再話／日野十成 絵／斎藤隆夫 1,320円(福音館書店)

何の日でしょうか？ 鬼が登場したところで、「鬼の嫌いな日は？」とヒントを出すと、「わかった！」の声が上がりそうですね。



②『チョコレートがおいしいわけ』

作／はんだのどか 1,650円(アリス館)

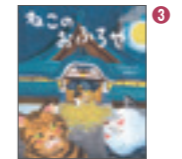
14日はバレンタインデー。長い旅をするカオオのことを、裏返しの地図で伝えましょう。



③『ねこのおふろや』

文／くさかみなこ 絵／北村裕花 1,650円(アリス館)

22日はネコの日、この日は特別サービスがありそう……。みんなはどのお風呂に入りたい？



3月 テーマ：春を知らせます

①『ぼとんぼとんは なんのおと』

作／神沢利子 絵／平山英三 1,320円(福音館書店)

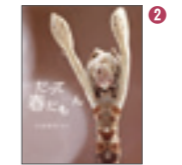
ぼうやが耳にする音は少しずつ春へ向かう音。母子の会話から春の近づき具合がわかります。



②『だって春だもん』

写真・文／小寺卓矢 1,540円(アリス館)

クマの親子が駆け出した先はこの森かもしれない。一緒に春の訪れを楽しみましょう。



③『おなべおなべ にえたかな?』

作／こいでやすこ 1,320円(福音館書店)

おなべとやりとりして、春のスープは大成功です！ どんな味かな？ おなかがすいてきたね。



(岩井淳子)



対象別おはなし会のプログラムです。
ここで紹介する絵本や紙芝居は、
ご家庭での読みきかせにもおすすめです。
ブックガイドとしてもご活用ください。

行事絵本・季節の絵本

新しい年

『しめかざり』

文・絵／森 須磨子 1,430円(福音館書店)
お正月に飾る、注連飾り。ワラからつくるのは同じでも、その形は、地域や飾る場所によっていろいろで、さまざまな思いが込められています。



冬

『さっちゃんのでぶくろ』

作／内田麟太郎 絵／つちだのぶこ 1,430円(金の星社)
さっちゃんが、なくした手袋を探していると、雪の下から「手袋がほしい……」とおじさんの声がしました。雪を掘ってみると、それは、大きな手袋でした。



卒園・卒業

『おおきくなったら きみはなんになる?』

文／藤本ともひこ 絵／村上康成 1,540円(講談社)
なりたいもの、なりたい自分になるため、いろんなことをたくさんしてみよう！ 卒園・卒業を迎える子どもたちを励まし、エールを送ります。



紙芝居

『おにとふくのかみ』

脚本／千田一彦 絵／福田庄助 2,090円(童心社)
ふたつの山に挟まれた小さな村がありました。北の冬山にすむ鬼に乱暴されて困った村人たちは、南の春山にすむ福の神に相談することにしました。



紙芝居

『やさしい おともだち』

原作／武田雪夫 脚本・絵／瀬名恵子 2,090円(童心社)
お百姓さんの馬小屋では、馬とネズミたちが仲よく暮らしていました。ある晩、馬小屋が火事になりましたが、網が邪魔をして、馬は逃げる事ができません。



(安富ゆかり)

保育者のたまごたちと絵本



栗岡洋美 くりおか・ひろみ

中京学院大学短期大学部保育科准教授。保育の現場を経て、2014年より現職。専門分野は保育学、教育学。パパ絵本・ママ絵本、保育の中のわらべ歌遊びなどを研究テーマとしている。保育に関する書籍執筆のほか、「乳幼児の発達と絵本」などの講座、「子育て支援事業におけるママ絵本活動の効果」などの学会発表も積極的に行っている。

保育現場の先生たちは、養成校で絵本についてどのように学んできたのでしょうか。
中京学院大学短期大学部の事例を栗岡洋美さんに伺う2回目です。取材文／荒木晶子



『たいせつなこと』
作／マーガレット・ワイス・ブラウン
絵／レナード・ワイスガード
訳／うちだややこ
1,595円（フレーベル館）



『ちよつとだけ』
作／瀧村有子
絵／鈴木永子
1,320円（福音館書店）



『おこりんぼママ』
作／ユッタ・パウアー
訳／小森香折
1,375円（小学館）



『今日』
訳／伊藤比呂美
画／下田昌克
1,540円（福音館書店）

お母さん自身が絵本を楽しむことで 子どもにとっても心地よい時間に

子育てサロンでお母さんたちに 絵本を読む「ママ絵本」

キャンパス内併設の認定こども園で行う「くりくりらんど」以外に、毎年、地域の子育てサロンでも絵本の読みかきをしています。私が「ママ絵本」と称してお母さんたちに絵本を読む活動をしている「環」で、すぐそばで学生たちも子どもたちに絵本を読んでいます。子どもたちの年齢は1〜2歳ぐらいと、「くりくりらんど」とは異なる年齢層なので、絵本の選び方が違ってきますし、人形劇など視覚的な注目を集めることも大切になり、学生たちはいろいろ工夫しながら取り組んでいます。子どもたちが読みかき集中してくれるので、お母さんたち

ちも安心して「ママ絵本」を楽しめているようです。

「ママ絵本」を始めたのは、保育の現場にいたころのことがきっかけです。「子どもに絵本を読まなくちゃ」「絵本は何歳から読んだほうがいい？」など、お母さんたちは絵本や読みかきせにプレッシャーを感じていました。でも、私は親子で絵本タイムを楽しんでほしいと思いましたし、今もそう思っています。

まずは、お母さんたちに絵本を好きになつてほしい。そして、「ママ絵本」を通して「あなたがいてくれるだけで幸せ」という無条件にわが子を愛する気持ちや、「あなたのことがとても大切」というわが子をいとおしく思う気持ちを再確認することで、お母さんたち

の笑顔が増えたらいいなと思っています。

絵本の魅力は 幸せな時間をつくりだせること

子どもにとっても、そういう環境で育つことは幸せにつながると思います。

特に乳幼児にとって、絵本は大好きな身近な大人に読んでもらうもの。その時間は心地よい言葉のシャワーを浴びるような幸せな時間で、それをつくりだせることが絵本の魅力だと思っています。子どもの発達や成長を促すためではなく、「お母さん自身が読みたい」「子どもと一緒に読みたい」という気持ちで読むことで、その時間や空間が子どもにとって心地

著作権保護コンテンツ

よいものになると思うのです。

学生たちを見ていると、ほとんどが絵本にいい印象を持っています。それは、絵本から何かを得るというよりも、うれしい、心地よい、楽しいなど、あたたかい記憶につながる大事なものがそこにあるからだと感じています。

日々の生活で忘れていた気持ち を思い出させてくれる絵本を

「ママ絵本」で読んでいるのは、私が「ママたちこそ読みたい絵本100冊」として選んだ絵本です。私自身が母として読んでみて、忙しさや子育ての大変さのために忘れていた気持ちや感覚を思い出させてくれるような絵本を選んでいきます。

サロンでよく読むのは『たいせつなこと』や『ちよつとだけ』ですが、まず子育ての悩みを話し合ってから絵本を読むことが多いので、何冊か用意していつか、悩みの内容や集まったお母さんたちの雰囲気や合った作品をその場で選ぶこともよくあります。

たとえば、子どもに怒ってばかりというお母さんには『おこりんぼママ』や『ぼくおかあさんのこと

』(文溪堂)を。一生懸命すぎるぐらい子育てにまっすぐなお母さんには『今日』や『おかあさんだもの』(アリス館)などという具合です。絵本を読んでいると涙を流されるお母さんもいますし、「大人でも絵本でこんな気持ちになれるんだ」「改めて絵本が好きと再確認できた」「育児中は自分ごとと回しになりがちだから、自分のために読んでもらえるのがうれしい」などの感想が寄せられ、手ごたえを感じています。

子どもたちの豊かな絵本体験には 保育者のチョイスが大事

保育の現場で子どもたちが豊かな絵本体験を得るには、保育者によるチョイスがとても重要になります。学生たちには、まずたくさんさんの絵本があることを知ってほしいし、実際に触れてほしいと思っています。

そのためには、大学の図書館に新しく絵本を入れる際には「この本、読んで！」などを参考にしながら、ジャンルや作者などができただけ偏らないようにしています。授業では、「私の好きな絵本」

というテーマで、学生が絵本を持ち寄って、どのようなところに惹かれたのかを伝え合うこともあります。

私自身は書店でひと目ぼれして以来、かがくいひろしさんの『おもちゃのきもち』(講談社)が大好きで、学生の前で思わず熱弁をふるってしまつこともあります。かがくいさんの絵本の主役は人間ではありませんが、人間的な心理が巧みに表現されていて、好ましくないような面もおしく思えてしまうところが魅力です。今、私のイチ推しは『がまんのキーキ』(教育画劇)。「この本読んで!」89(2023年冬)号でかがくいさんのお人柄に触れて、ますます好きになりました。

学生にも、さまざまな絵本から「おもしろい」「素敵だな」「この絵いいな」など、何かを感じてほしいと思っています。保育者自身が絵本に対して感じていることが子どもたちに伝わり、「読みたい」「一緒に味わいたい」と思ってくれると思うからです。

絵本に興味を持って楽しみながらそんな力を積み重ねていき、子どもと一緒に絵本を楽しめる保育者になつてほしいですね。

支援の必要な子 と絵本

神奈川県立平塚盲学校では、幼稚部から高等部まで、多彩な読書活動が行われています。

前回は、幼児期から始まる読書体験を紹介しました。第2回となる今回は「読書支援編」。

小学部を中心に、絵本や本との出会いがどのように学びへとつながっていくのか、先生方の取り組みとともにお届けします。

取材・文／小山まゆみ



1910(明治43)年に開校された平塚盲学校は、幼稚部から高等部(本科普通科、専攻科)までの教育課程があり、寄宿舎も併設されています。写真は左から学校司書・池谷晶子さん、教務部教諭・畑谷克枝さん、小学部教諭・滝口千代さん、幼稚部教諭・田中麻衣さん。

選書の鍵は、言葉の響き。 体験活動で理解を深める

——幼稚部での読書支援では、ゆっくり話すことや、絵本に登場するものにふれる体験、さらに動作と言葉を結びつける工夫が大切だと伺いました。

田中さん（以下、幼稚部） もうひとつ大事ななのは音の響きです。子どもたちは、擬音が大好き。リズムのある言葉にふれると、自分から言葉を出してみようという気持ちが芽生えます。私たちはそうした体験をひとつひとつ積み重ねられるよう支援しています。

——読書支援の方法は、成長とともにどのように変わっていくのでしょうか。

滝口さん（以下、小学部） 幼稚部からの流れを受けて、具体物にふれる体験を続けています。加えて、本に合わせた体験活動を読書のたびに取り入れていきます。たとえば、松ぼっくりを拾って転がしてみたり、おにぎりの絵本ではおにぎりになりきって転がったり。『おおきなかぶ』では、みんなでかぶを引っ張るなど、言葉と行動を結びつけて学べるよう工夫しています。

幼児期の読書体験が育む イメージの力

——選書の際は、どのような点を意識されていますか。

小学部 小学部でも音を大切にしています。たとえば、覚えやすいリズムの言葉や、繰り返し表現が出てくる本を選ぶことが多いですね。子どもたちは耳から入る言葉の響きに敏感で、「これ好き!」とすぐ反応してくれます。

幼稚部 発語のなかった子が、絵本をきっかけに「コロリンコ」「コロコロ」と声を出すこともあります。わからないながらも絵本の言葉を口にしていく姿を見ると、教員は「さっき読んだおはなしだ!」と気づき、思わずうれしくなります。

畑谷さん（以下、教務部） 声の調子まで、教員と同じように真似する子も多いですね。

小学部 『もりもりくまさん』では、「もりもりもりもりおかわりもりもりもりもり たべちゃったわお!」とリズムをつけて読むのが定番です。

幼稚部 その「わお!」のところは、みんなで一緒に声をそろえるのがお約束。私も好きな『おーなみこなみざぶん!』の絵本には、歌が出てきます。調子はずれる先生もいますけれど、それがまた楽しいですね。

教務部 絵本の言葉は授業にもつながっていきます。私が担当しているお子さんも、絵本から培った言葉を授業で自然に使っています。

小さいころに絵本や歌でふれた言葉やリズムは、その後の学びを助ける大切な基盤になります。

す。読書を通して「幼稚園で触ったよ」「見たよ」という体験の積み重ねは、その子にとっての大きな土台になります。そして、その体験が豊かであればあるほど、文章を読んだときにイメージを広げる力につながっていくのです。

点字でも、音声でも 広がる読書の世界

——授業と読書活動は、どのように連携していますか。

小学部 1～6年生の国語の授業の中で、「図書館と仲よし」などの学習を行っています。私のクラスでは、朝の会の前に読書の時間を設けています。さらに、週に2回「課題コミュニケーション」という国語の授業で、おもに絵本の読みかきを行っています。

また、その日の給食に出るメニューに合わせて絵本を読むク

ラスもあります。たとえば、カレーの日には『ぐるぐるカレー』を読むなど、子どもたちの生活と読書をつなげています。

池谷さん 小学部の先生方が児童と一緒に図書館へ来て、絵本を選んでいかれる姿もよく見られます。とくに給食に関連する「食べ物の本」は人気で、子どもたちの反応もいいですね。

小学部 生活科のまち探検の一環として、地域の図書館へ行った学年もありますし、6年生では公共図書館へ行く学習を行っています。

中学部ではさらにステップアップし、本で調べる学習に広がります。修学旅行に関連する資料を探したり、家庭科の授業でレシピを調べたり。授業と図書館利用がしっかり結びついています。

——読書好きの生徒さんが多いのですね。

幼稚部 ある生徒は乳幼児相談のころからお母さんと一緒に本を借りに来ており、その習慣

調べる資料は点字です。生徒によって案内する資料は異なりますが、質問を自分でまとめて聞けるようにすることも、授業の大切なねらいです。

幼稚部 中学部の教員によると、多くの生徒が「サピエ図書館（視覚障がい者向けに点字や音声で読める電子図書を提供する全国ネットワーク）」を活用しています。サピエ図書館には、耳で聞くデイジー図書や点字図書があり、専用の点字携帯端末にダウンロードして利用します。こうした音声図書を日常的に聞くことは、中学部の生徒にとって当たり前の読書スタイルになっているようです。



『おおきなかぶ ロシアの昔話』

再話／A. トルストイ
訳／内田莉沙子
画／佐藤忠良
1,320円(福音館書店)



『もりもりくまさん』

作／長野ヒデ子
絵／スズキコージ
1,320円(鈴木出版)



『おーなみこなみ ざぶん!』

作／長野ヒデ子
絵／西村繁男
1,430円(佼成出版社)



『ぐるぐるカレー』

作／矢野アケミ
1,100円(アリス館)

——今回は、学校図書館の使い方や寄宿舎での読書活動、そして先生方からのメッセージをご紹介します。

をずっと続けてきました。中学部になった今では、自分の機器に図書を取り込み、耳で本を楽しむことが日常になっています。こうした「読む・聞く」を継続する姿勢は、本校の中学部の子どもたちに広く見られる特徴です。

教務部 幼児期に読んでもらう経験から始まり、小学部では点字を学び、自分で読む喜びを知る。そして、中学部になるとデイジー図書などの機器を使い、好きな本を自由に楽しむようになります。こうして一歩ずつ読書の世界を広げていく姿は、目の見える子どもたちと変わりません。視覚に障がいがあっても、本を楽しむ力は同じように育っていくのです。